

九戸郡西部における古代集落の研究（1. 九戸村）

村田 淳

九戸郡西部（九戸村・軽米町・久慈市山形町）は、山間部でありながら古代（7～11世紀）の集落が多数分布し、平安時代には「高地性集落」も確認されている地域である。高地性集落は立地や堀を有する点などからその特殊性が強調されてきたが、平地（低地）の集落と遺構・遺物の様相が異なるのかを比較した研究は少ない。そこで本稿では、九戸郡西部のうち九戸村を対象に高地性集落を含め発掘調査された古代集落の内容を整理する。

はじめに

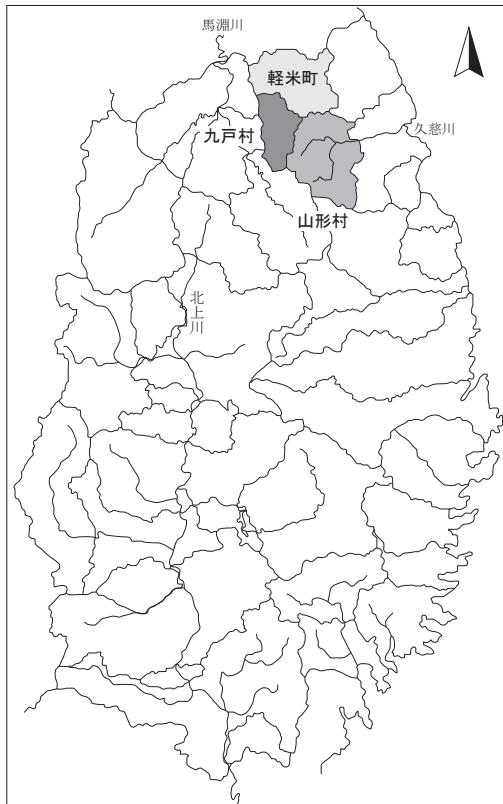
九戸郡は岩手県北部に位置しており、現在の行政区分では九戸郡九戸村・軽米町・洋野町・野田村及び久慈市である。このうち本論で対象とする九戸郡西部は九戸村・軽米町及び旧九戸郡山形村（現久慈市山形町）のことを指し（第1図）、いわゆる「高地性集落」が多数確認されている。

高地性集落は、その立地及び溝等の区画施設を有するものの存在から「防御性集落」あるいは「環濠集落」とも呼ばれる。考古学的には西日本を中心に分布する弥生時代のものを想像する場合が多いが、東北地方北部では基本的に平安時代に形成される集落である。特に太平洋側では北緯40°線以北に分布することが知られ、山間部の尾根上に竪穴状の窪みが認められるものも多いことから地元では「蝦夷館」とも呼ばれている。以下では、高地性集落の研究史について簡単に触れておきたい。

高地性集落は山間部に位置するという立地の性格上、開発に係る緊急発掘調査の事例は多くない。しかし、1990年代には東北地方北部3県で発掘調査事例が増加し、この種の集落遺跡の性格を解明しようとする研究が活発化する。その中で工藤雅樹は東北地方北部の環濠集落・高地性集落を大きく4つに分類し、その出現を当時の蝦夷社会の社会的な緊張状況に求めている（工藤1995）。

岩手県内では、1990年代後半に福島大学による西根町（現八幡平市）子飼沢山遺跡・暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡の発掘調査が実施される（福島大学1996・2000）。また、福島大学は九戸郡域でも古くから竪穴状の窪みが確認されていた九戸村黒山の昔穴遺跡で3年に渡り内容確認のための発掘調査を実施している（九戸村2003b・2004・2005）。黒山の昔穴遺跡は、その成果を受けて2007年に岩手県指定史跡となっている。その後、2014～2017年にかけて外久保遺跡や長興寺Ⅸ遺跡といった関連遺跡も含め、発掘調査や分布調査が実施されており（九戸村2021）、黒山の昔穴遺跡は2024年に国史跡に指定されている。

2000年代に入ると、調査遺跡数が増加しなかったこともあり高地性集落研究は低調であったが、近年では小口雅史を研究代表とするグループによる現地踏査（小口・八木2022）や岩手県教育委員会による高地性集落跡悉



第1図 対象地域位置図

皆調査に関する検討会議が実施されるなど、再び注目が集まっている。なお、八木光則は西日本の弥生時代の高地性集落が既に時代や地域を限定して使用されている点を考慮して「山地集落」と呼称している（八木 2011）。

これまでの研究を概観すると、高地性集落は立地や堀を有する点などからその特殊性が強調され、防御性集落の一類型とみなされることが多かった。確かに高所に立地するという点でいわゆる平地（低地）に形成される集落とは異なる性格を有している可能性はあるが、高田和徳が指摘するように「ことさら防御性のみを強調するのではなく、山地を積極的に選択した何らかの理由を考える必要」がある（九戸村 2021）。高地性集落と平地の集落について、同一地域内での遺構・遺物の比較検討を行った研究は多くないが、九戸郡西部は八戸自動車道建設関連の発掘調査などで古代の集落遺跡が調査されており、比較検討を行いうる地域である。そこで本稿では、九戸郡西部のうち九戸村を対象として発掘調査された遺跡の内容を整理する。

1. 九戸村の地理と発掘調査遺跡の概要

九戸村は岩手県の内陸北部、北上山地の北端部に位置する。1955年に江刺家村・伊保内村・戸田村の3村が合併して成立した村で、西に二戸市と一戸町、北に軽米町、東に久慈市、南に葛巻町が隣接する。南北約20km、東西約10kmと南北に長い形をしており、総面積は134.05km²である。村内の中央やや西寄りには平庭岳を源流とする新井田川水系の瀬月内川が北流しており、現代の主な集落はその流域沿いの平地に点在している。なお、瀬月内川は同じく新井田川水系で軽米町内を流れる雪谷川と青森県境付近で合流して新井田川となる。

九戸村では、分布調査等により225遺跡が確認されている（註1）。古代の遺跡は63遺跡確認されており、このうち発掘調査が実施されたのは15遺跡である（第2図）。主体となるのは八戸自動車道建設及び国道340号線改良工事に伴う緊急発掘調査であるため、調査遺跡はそのルート上に位置する江刺家地区に集中する。

2. 遺構の内容

発掘調査が実施された15遺跡のうち、古代の遺構は13遺跡で検出されている（第1表、註2）。遺構種別は竪穴建物・竪穴状遺構・土坑であり、以下では遺構種別ごとに内容をみていく。

（1）竪穴建物（第3～7図）

12遺跡で67軒検出されており、最も検出数の多い遺構である。時期別の軒数は、7世紀中葉が1遺跡11軒、7世紀後葉～8世紀前葉が1遺跡1軒、8世紀前～中葉が1遺跡1軒、9世紀後葉～10世紀前葉が2遺跡19軒、10世紀前～中葉が3遺跡13軒、10世紀中葉が1遺跡2軒、10世紀中～後葉が1遺跡3軒、10世紀後葉が2遺跡8軒、時期不明が3遺跡9軒である。なお、現在のところ8世紀後葉～9世紀中葉に属する竪穴建物は検出されていない。

7世紀中葉の竪穴建物は、丸木橋遺跡（遺跡No.1、以下No.のみ記載）で検出されている。いずれも竪穴部のみで構成されており、主軸方向は北～北西である。竪穴部の長軸規模は、平均値が4.0m、最大は第10号住居跡の6.4m、最小は第5号住居跡の2.9mである。柱構造は、無柱穴が2軒、竪穴中央4本柱が3軒、6本柱が1軒であり、第10号住居跡では6本柱で肋骨状の間仕切り溝が検出されている（第3図）。付属施設は、第9号住居跡で地床炉が1基検出されているのみである。なお、丸木橋遺跡では11軒中7軒が焼失家屋である。

カマドは、検出された8軒いずれも北壁中央に1基設置されている。本体部のうち袖部は礫を芯材

として弱粘質土で固められており、土器を使用しているものもある。煙道部はいずれも掘り込み式の長煙道で、煙道断面は地表に向かって上昇し、煙出しピットを有する。

7世紀後葉～8世紀中葉の竪穴建物は、田代遺跡（7）と沖遺跡（12）で各1軒検出されている。いずれも竪穴部のみで構成され、長軸規模は7世紀中葉のものと変わらない。主軸方向はいずれも北西であるが、前代のものより西に振れるようになる。柱構造は、田代遺跡C03-1号住居（以下、「遺跡」省略）が無柱穴、沖1号竪穴住居が竪穴壁際4本柱である（第3図）。カマドはいずれも壁面中央に1基設置されており、沖1号竪穴住居の袖部は弱粘質土で構築されている。なお、2軒とも削平



第2図 古代発掘調査遺跡分布図（縮尺=1/50,000）

第1表 九戸村古代発掘調査遺跡一覧

No.	遺跡名	字名	遺跡標高 (m)	遺構種別					年代												備考	出典			
				竪穴建物	竪穴状遺構	掘立柱建物	土坑	溝	その他	7世紀前葉	7世紀中葉	7世紀後葉	8世紀前葉	8世紀中葉	8世紀後葉	9世紀前葉	9世紀中葉	9世紀後葉	10世紀前葉	10世紀中葉	10世紀後葉	11世紀前葉	11世紀中葉	11世紀後葉	不明
1	丸木橋	江刺家17地割	215~225	11						■	■														岩文振189集
2	葉ノ木沢	江刺家18地割	230~245																			■	土師器片のみ	岩文振154集	
3	嶽 I	江刺家14地割	300~320																			■	土師器片のみ	岩文振50集	
4	嶽 II	江刺家13地割	285~315	4														■							岩文振78集
5	滝谷Ⅲ	江刺家6地割	305~320	2														■	■						岩文振49集
6	江刺家	江刺家6地割	260~280	32	1		12										■	■							岩文振70集
7	田代	江刺家2地割	250~270	1						■	■														岩文振41集
8	黒山の昔穴	江刺家1地割	405~440	5			2																		九戸村5・7・8集
9	外久保	長興寺12地割	345~360	3			2											■	■						九戸村12集
10	長興寺 I	長興寺13地割	305~360				2															■			岩文振388集
11	長興寺Ⅸ	長興寺8地割	320~330		2																	■			九戸村12集
12	沖	長興寺10地割	260~270	1					■	■															岩文振708集
13	南田 I	伊保内26地割	275~300	2																					岩文振307集
14	熊野館	伊保内10地割	270~320	3																		■	10世紀代か	九戸村1集	
15	川向Ⅲ	伊保内15地割	305~320	3	1		2										■	■							岩文振26集
		計			67	4	20																		

そのため煙道部の構造は不明である。

9世紀後葉～10世紀前葉の竪穴建物は、江刺家遺跡（6）で17軒、南田I遺跡（13）で2軒検出されている。いずれも竪穴部のみで構成されており、長軸規模は平均値が4.4 mと8世紀前葉以前のものと大差はないが、最大は江刺家H II - 1住居跡の7.6 m（第4図）、最小は南田I 1号竪穴住居跡の1.4 mと幅がある（註3）。主軸方向は、北～北西が7軒、北～北東が3軒、北東～東が1軒、東～南東が2軒、西～南西が1軒、南西～南が2軒であり、北西方向以外のものも出現するようになる。柱構造がわかるものは11軒で、内訳は無柱穴が2軒、竪穴中央4本柱が2軒、竪穴中央2本・カマド壁際2本柱が4軒、竪穴壁際4本柱が1軒、竪穴中央2本・壁際2本柱が2軒である。設置位置は異なるが4本柱構造が9軒と最も多い（江刺家H II - 1号住居等、第4図）。付属施設は、周溝が12軒、貯蔵穴が7軒で検出されている。

カマドは12軒で検出されている。前代までは北壁面中央にのみ設置されていたが、主軸方向が多様化するに伴い他の壁面やコーナー部付近に設置されるものも出現する。袖部は、礫や土師器甕を芯材として粘土を用いるものと芯材を使用せず粘土のみ用いるものがある。煙道部はいずれも長煙道で、刳り貫き式で煙道断面の最下面が床面レベルより深く掘り込まれるものが主体である。煙出しピットは6軒で確認されているが、煙道底面と煙出し底面がフラットになるものが8軒と煙出しピットを持たないものの比率が高くなっている。なお、カマドの作り替えは3軒で確認されている（江刺家K III - 3号住居など、第4図）。

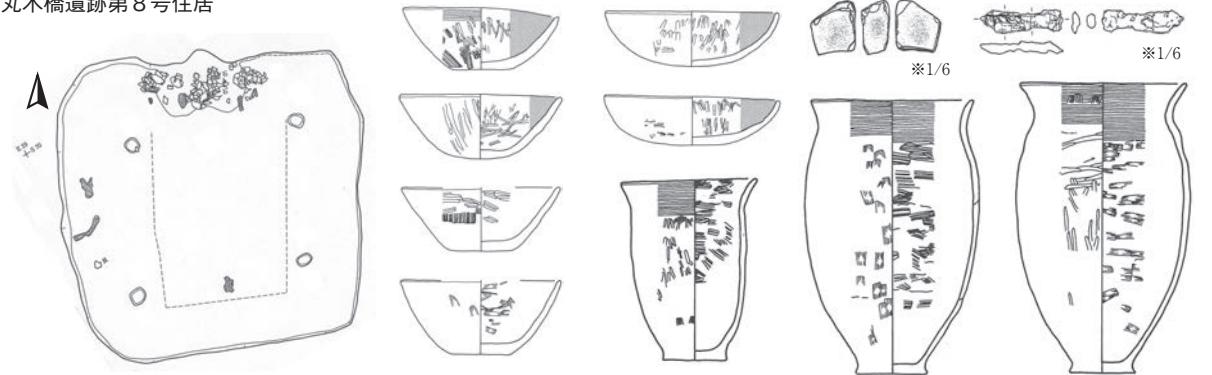
10世紀前～中葉の竪穴建物は、滝谷Ⅲ遺跡（5）で2軒、江刺家遺跡で8軒、川向Ⅲ遺跡（15）で3軒検出されている。いずれも竪穴部のみで構成されており、長軸規模は平均値が4.6 mと前代とほぼ変わらないが、最大が江刺家C II - 5住居の6.8 m、最小が滝谷Ⅲ B F 16住居と江刺家K II - 4住居の3.5 mで規模の差が小さくなっている。主軸方向は、北～北西が5軒、北～北東が2軒、北東～東が3軒、東～南東が1軒、北西～西が2軒であり、前代と傾向はほとんど変わらない。柱構造がわかるものは9軒で、内訳は無柱穴3軒、竪穴中央4本柱1軒、竪穴中央2本・カマド壁際2本柱3軒、竪穴中央2本・壁際2本柱2軒である。付属施設は、周溝が5軒、貯蔵穴は2軒、炉は1軒で検出されている（江刺家C II - 4号住居、第5図）。

カマドは12軒で検出されている。前代と同じく設置壁面は多様であり、壁面中央よりもコーナー部寄りのものが増加している。袖部の構築方法は前代と変わらず、礫や土師器甕を芯材として粘土や

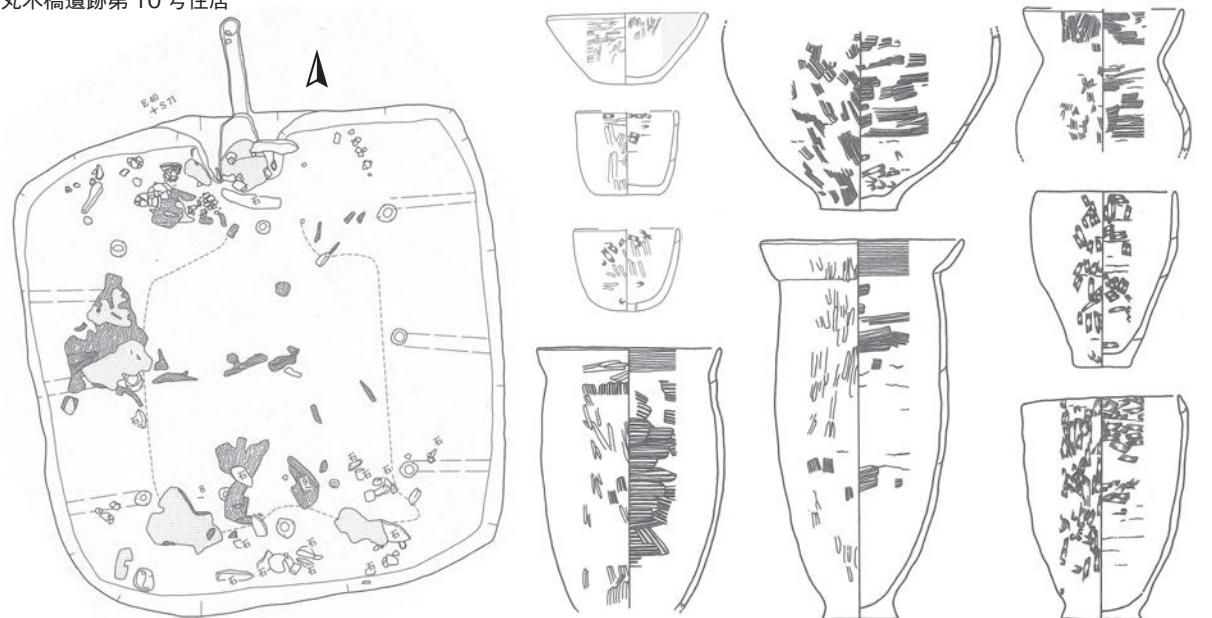
弱粘質土を用いるものが主体である。煙道部は割り貫き式の長煙道が大半である点は前代と同じであるが、煙道断面が下降するものが減少し水平または上昇するものが主体となる。なお、カマドの作り替えは1軒で確認されている。

10世紀中葉の竪穴建物は、江刺家遺跡で2軒検出されている。竪穴部のみで構成され、長軸規模の平均値は4.7mである。主軸方向は、北・東が各1軒である。柱構造がわかるのは江刺家D II-5住居で、竪穴床面中央2本・壁際2本柱である（第5図）。また、江刺家D II-5住居では周溝と貯蔵穴が検出されている。

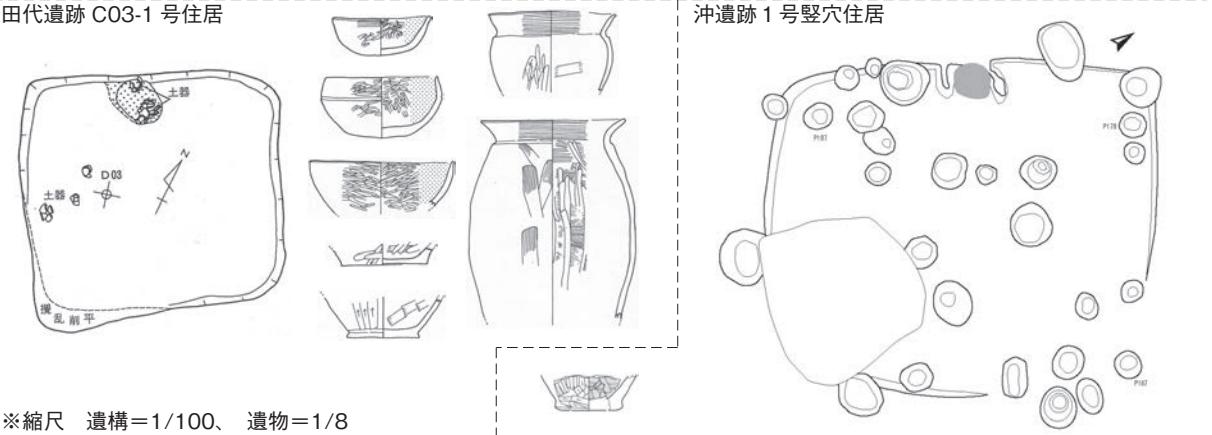
丸木橋遺跡第8号住居



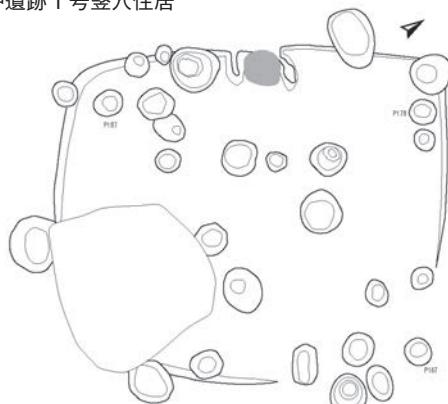
丸木橋遺跡第10号住居



田代遺跡 C03-1号住居

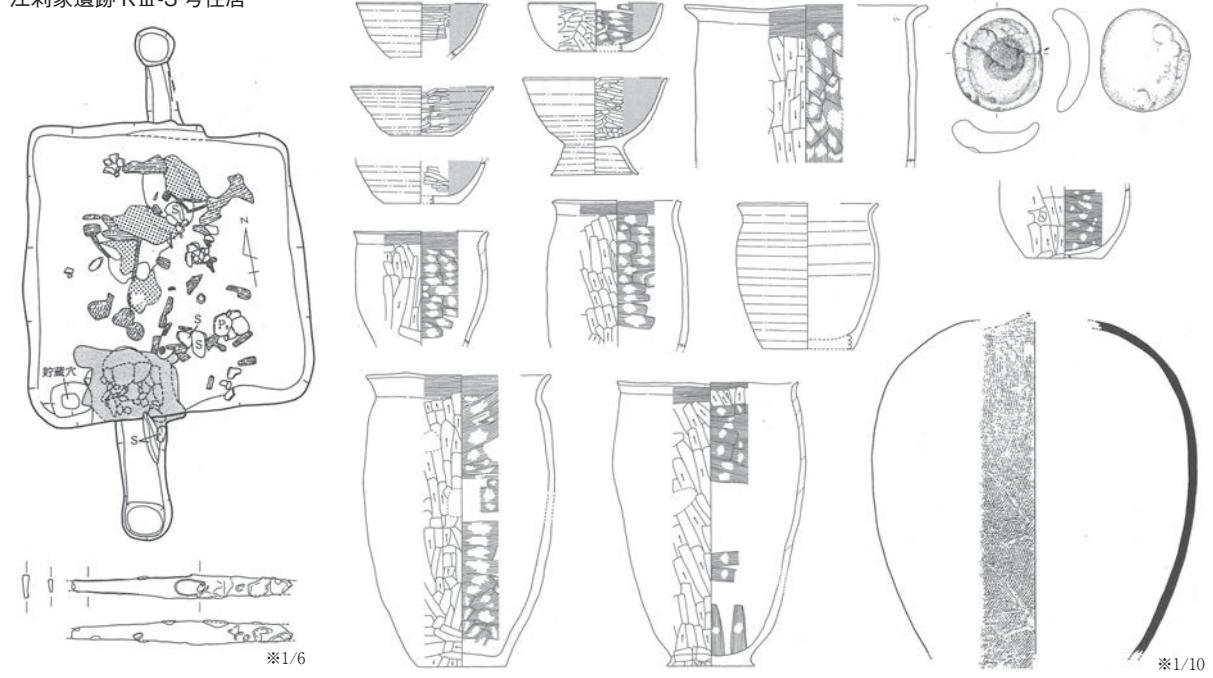


沖遺跡 1号竪穴住居

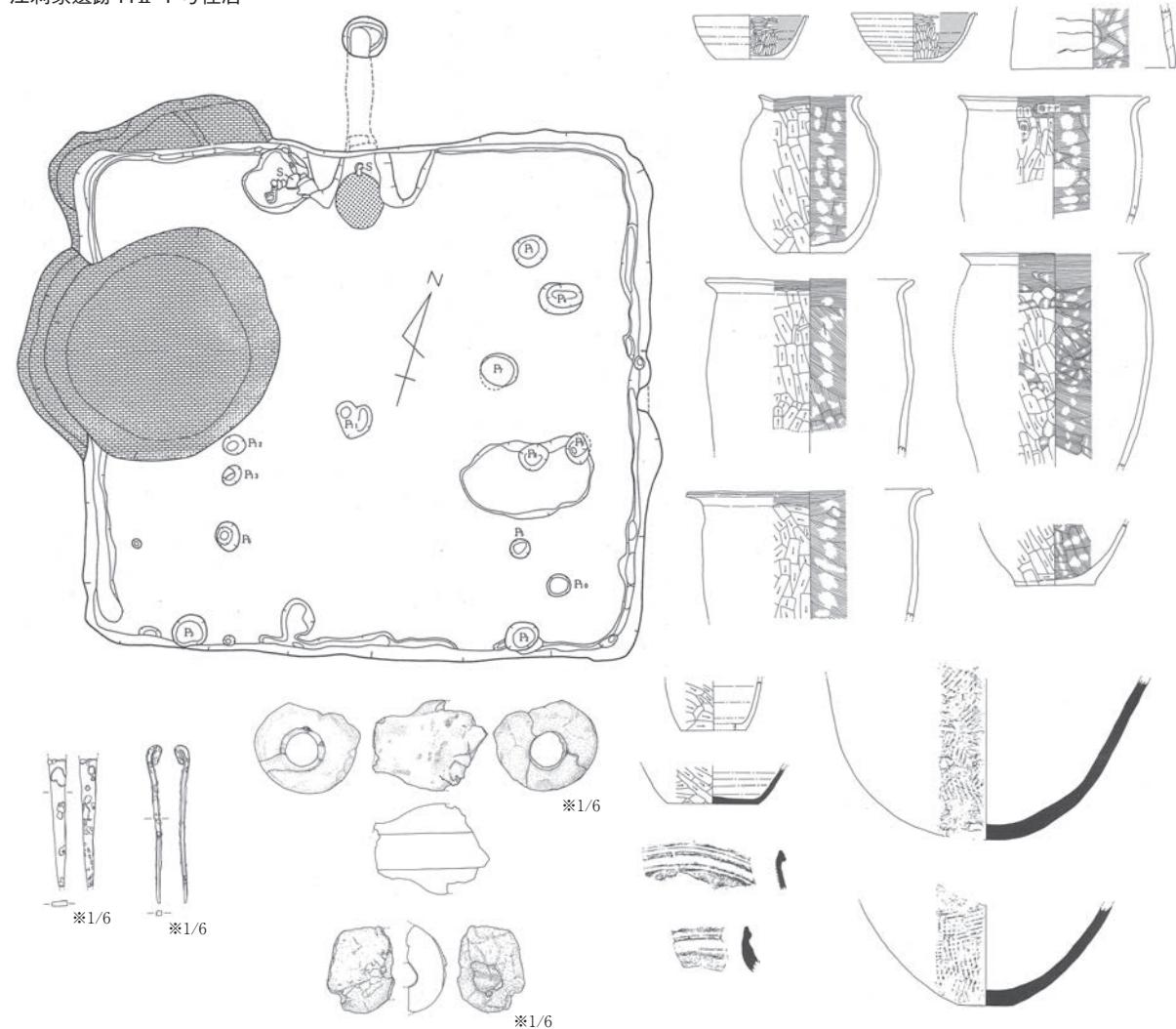


第3図 7～8世紀の竪穴建物

江刺家遺跡 KIII-3号住居



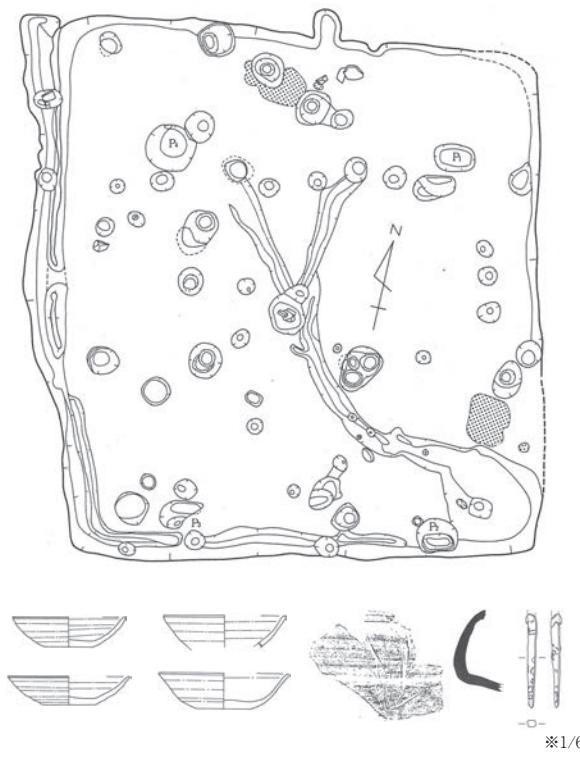
江刺家遺跡 HII-1号住居



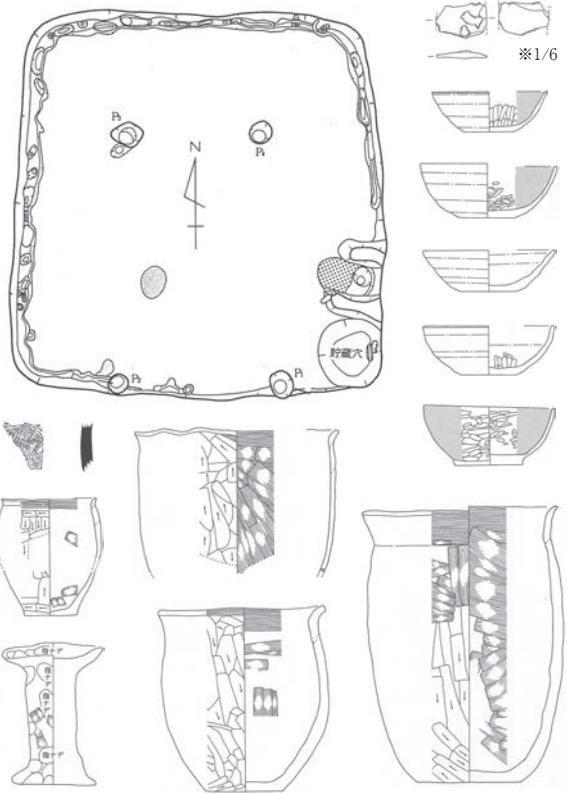
※縮尺 遺構 = 1/100、 遺物 = 1/8

第4図 9～10世紀の竪穴建物

江刺家遺跡 C II -4 号住居

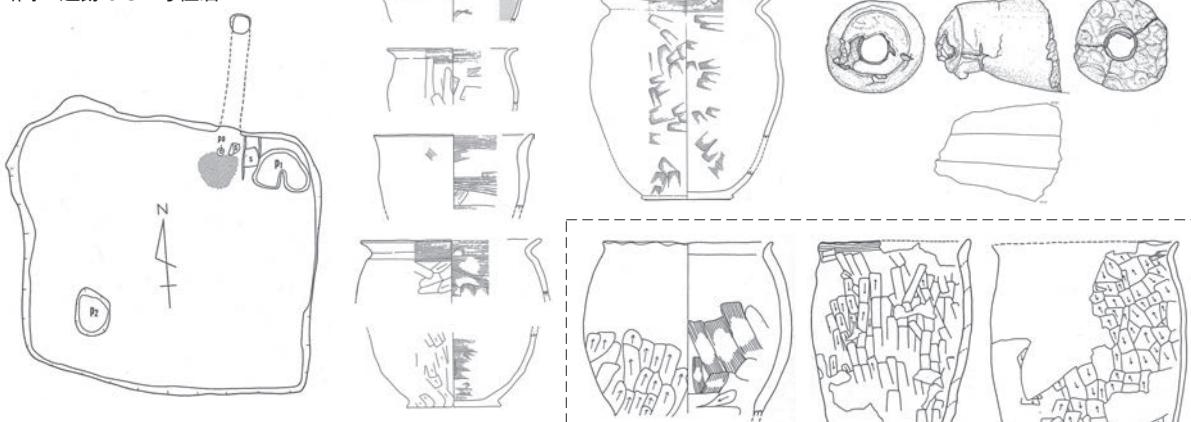


江刺家遺跡 D II -5 号住居

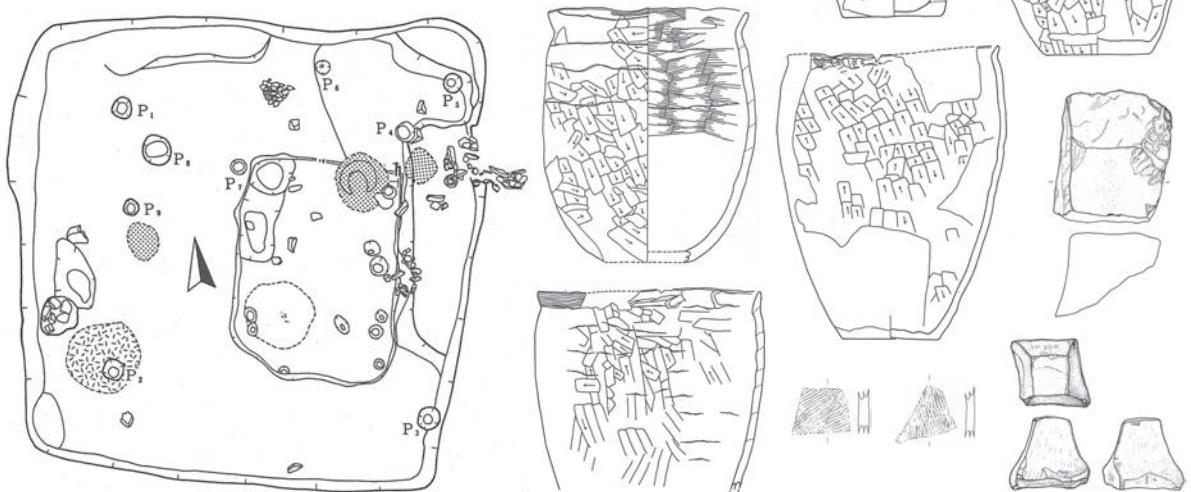


※縮尺 遺構 = 1/100、遺物 = 1/8

川向Ⅲ遺跡 J-31 号住居



嶽Ⅱ遺跡 24 号住居



第5図 10世紀の竪穴建物（1）

カマドは2軒とも検出されており、いずれも袖部は礫を芯材として粘土を用いている。煙道部は割り貫き式の長煙道で、煙道断面の最下面が床面レベルより深く掘り込まれる。

10世紀中～後葉の竪穴建物は、外久保遺跡（9）でのみ検出されている。竪穴部のみで構成され、長軸規模は平均値が7.2m、外久保S I 02-2は8.7mで全期間を通じて最大規模である（第6図）。主軸方向は、東が2軒、南が1軒である。柱構造がわかる2軒はいずれも無柱穴であるが、竪穴部の規模が大きく、無柱穴でどのように上屋を架行したかは不明である。付属施設は外久保S I 02-2で周溝と張り出しが検出されている。

カマドは2軒で検出されているが、煙道部は削平されており不明である。袖部は、礫を芯材として粘土を用いるものと石組みのものがある。

10世紀後葉の竪穴建物は、嶽II遺跡（4）で3軒、黒山の昔穴遺跡（8）で5軒検出されている。嶽II遺跡の竪穴建物は竪穴部のみで構成されるが（嶽II 24号住居、第5図）、黒山の昔穴遺跡では5軒中4軒で周堤が確認されている。このうち第4号竪穴住居の周堤は、竪穴部の北東から西に向かって幅約3mの半月状に残存しており、竪穴部の掘削土を盛り上げて構築されたと推定されている（第6図）。竪穴部の長軸規模は、平均値が4.8mと前代に比べて大幅に縮小している。主軸方向は、北～北東が2軒、東～南東が4軒、南東～南が1軒である。柱構造がわかるものは5軒で、内訳は無柱穴2軒、竪穴床面中央2本・カマド壁際2本柱3軒である。付属施設は、周溝が1軒、貯蔵穴が3軒で検出されている（黒山の昔穴第4号竪穴住居、第6図）。

カマドは、8軒全てで検出されている。袖部は、礫または土師器甕を芯材として粘土や弱粘質土を用いている。煙道部は割り貫き式の長煙道で、煙道断面は地表面に向かって上昇する。

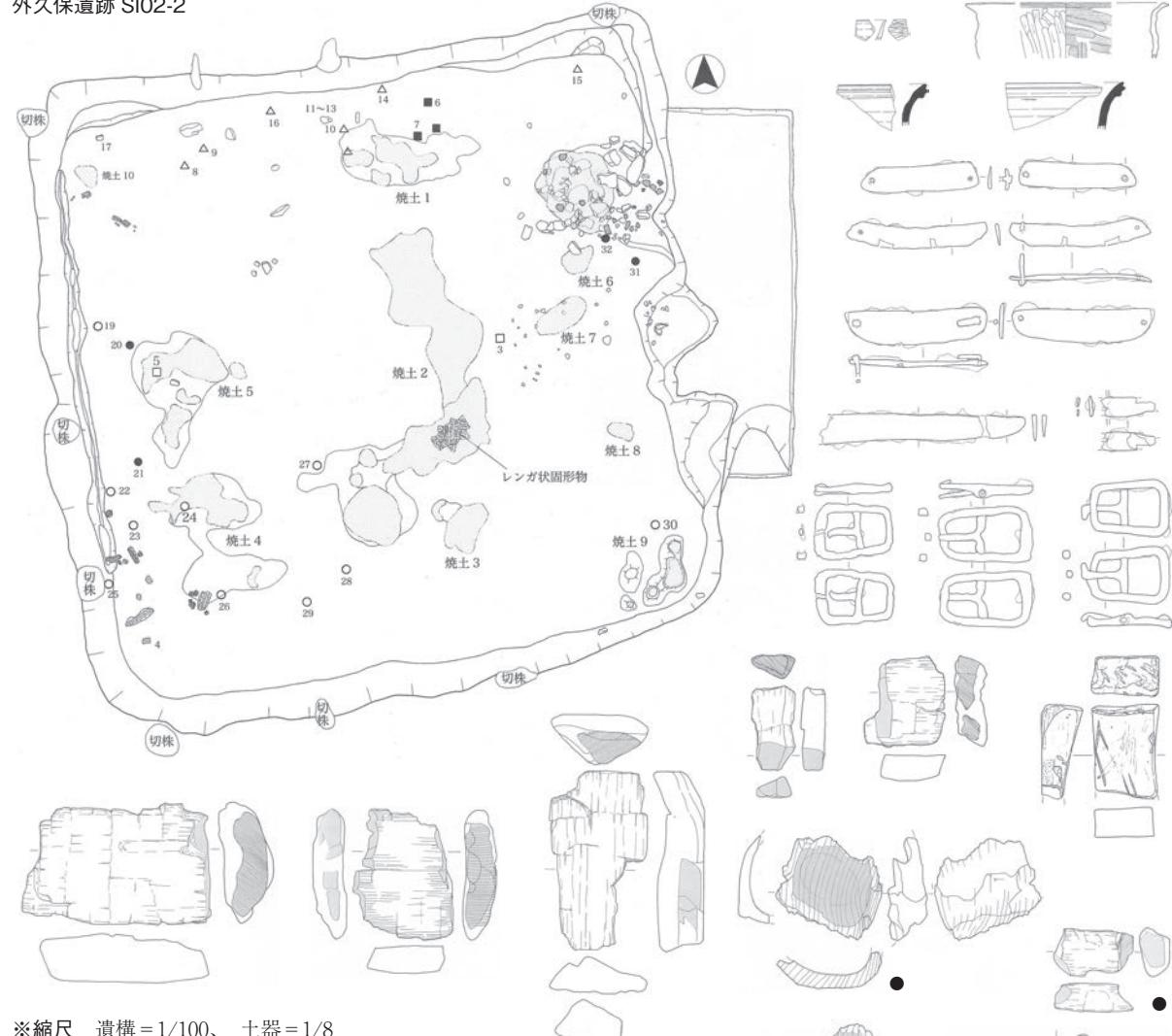
以上が時期別の竪穴建物の内容であるが、最後に全期間を通じての特徴についてまとめておきたい。まず形態であるが、67軒中63軒が竪穴部のみで構成されており、周堤を有するのは黒山の昔穴遺跡の4軒のみである。竪穴部の長軸規模は、最大が外久保S I 02-2の8.7m（10世紀中～後葉）、最小が南田I 1号竪穴住居の1.4m（9世紀後葉～10世紀前葉）である。全期間を通じての平均値は4.4mで、37軒が平均値から前後1m以内の規模である。主軸方向は、真北を中心に東西に30°以内のものが34軒と半数を占めており、時期的に古いものに多い。一方、9世紀後葉以降になると東・西・南に振れるものが多くなっている。柱構造は判明する37軒中24軒が4本柱であり、時期的な偏りは見られない。付属施設は周溝が23軒と最も多く、次いで貯蔵穴が14軒、地床炉が3軒、張り出しが1軒で、全体を調査した竪穴建物でも付属施設が確認されないものも多い。

カマドは48軒で検出されており、いずれも竪穴内に構築されている。袖部の構造は、礫や土師器甕を芯材として粘土や弱粘質土を用いるものが40軒、粘土のみ用いるものが6軒、石組みのものが2軒である。構築位置は7世紀中葉～8世紀中葉は壁面中央に設置されるが、9世紀後葉以降はコーナー部付近に設置されるものが増加する。煙道部はいずれも長煙道で、割り貫き式の煙道が多い。煙道の傾きと煙出しピットの有無は、7世紀中葉～8世紀中葉までは上昇または水平型で煙出しピットを持つものが多いが、9世紀後葉～10世紀前葉には下降型で煙出しピットを持たないものが増加する。続く10世紀中～後葉には再び上昇または水平型が増加するが、煙出しピットを持つものは少なくなるというように時期的に傾向が異なっている。

（2）竪穴状遺構（第8図）

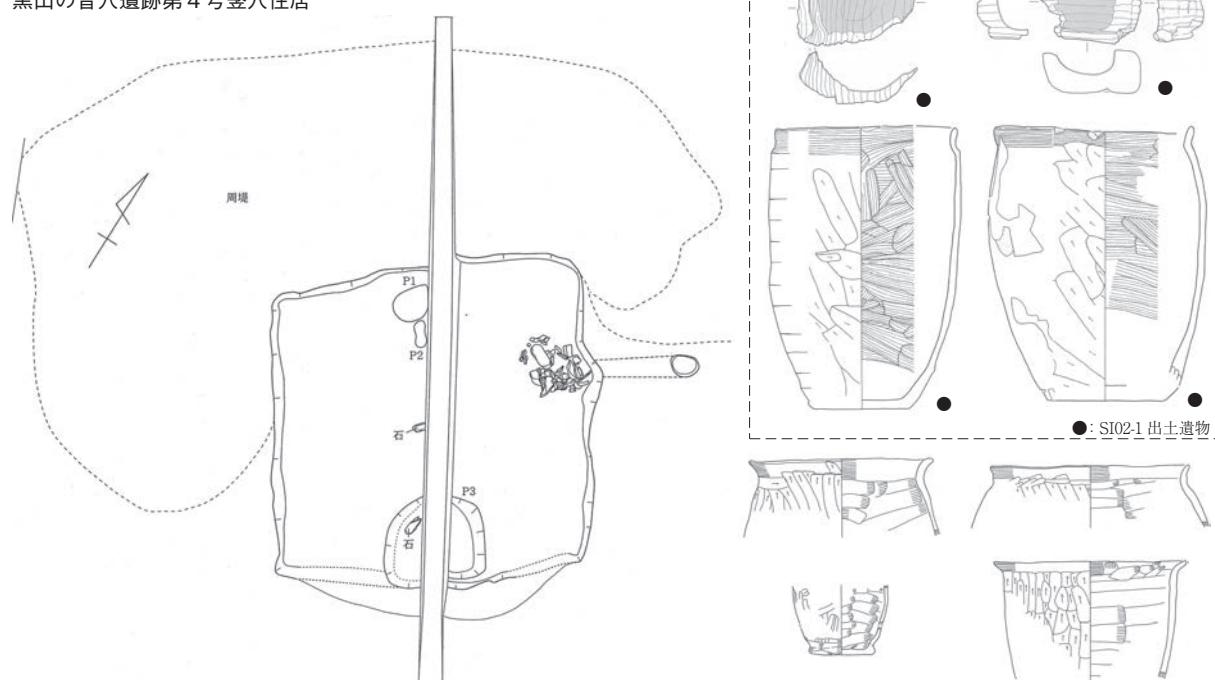
平面形が正方形基調で、カマドや炉といった火処を持たない竪穴状の遺構を一括した。3遺跡で4基検出されており、内訳は江刺家遺跡1基、長興寺IX遺跡（11）2基、川向III遺跡1基である。長軸規模は、最大が長興寺IX S I 03の4.1m、最小が江刺家H II - 51土坑の2.3mである。平均値は3.1

外久保遺跡 SI02-2



※縮尺 遺構 = 1/100、 土器 = 1/8
金属・木製品 = 1/6

黒山の昔穴遺跡第4号竪穴住居



第6図 10世紀の竪穴建物（2）

mで、竪穴建物（4.4 m）より小型である。付属施設は無く、壁面が直線的に立ち上がり、検出面からの深さも0.8 m以上あるため平面形は同じでも竪穴建物とは視覚的にも異なる遺構である。出土遺物は土器類の細片がほとんどで年代の特定は難しいが、長興寺IX S I 01・03は共に十和田a降下火山灰（To-aテフラ、915年降下）堆積層を掘り込んで構築されていることから10世紀中葉以降に属すると考えられる。性格については貯蔵・保管施設の可能性もあるが、長興寺IX遺跡のように竪穴状遺構のみで構成される遺跡もあることから現時点では不明である。

(3) 土坑（第8図）

5遺跡で20基検出されており、内訳は江刺家遺跡12基、黒山の昔穴遺跡・外久保遺跡・長興寺I遺跡（10）・川向III遺跡各2基である。平面形は楕円形・方形・円形があり、長軸規模は1～3m程度である。断面形は箱形・逆台形・皿形と多様であり、付属施設として底面に周溝や柱穴を持つものもある。出土遺物は土器類の細片が多いため年代の特定は難しいが、8世紀中葉以前の遺跡から検出されていないことから9世紀後葉～10世紀後葉に属すると考えられる。性格についても特定は難しいが、底面に周溝を持つ川向III I - 10ピット2や江刺家K II - 55土坑などは土坑墓、焼土中から骨片と土師器が出土した江刺家E I - 52土坑は火葬墓の可能性がある。

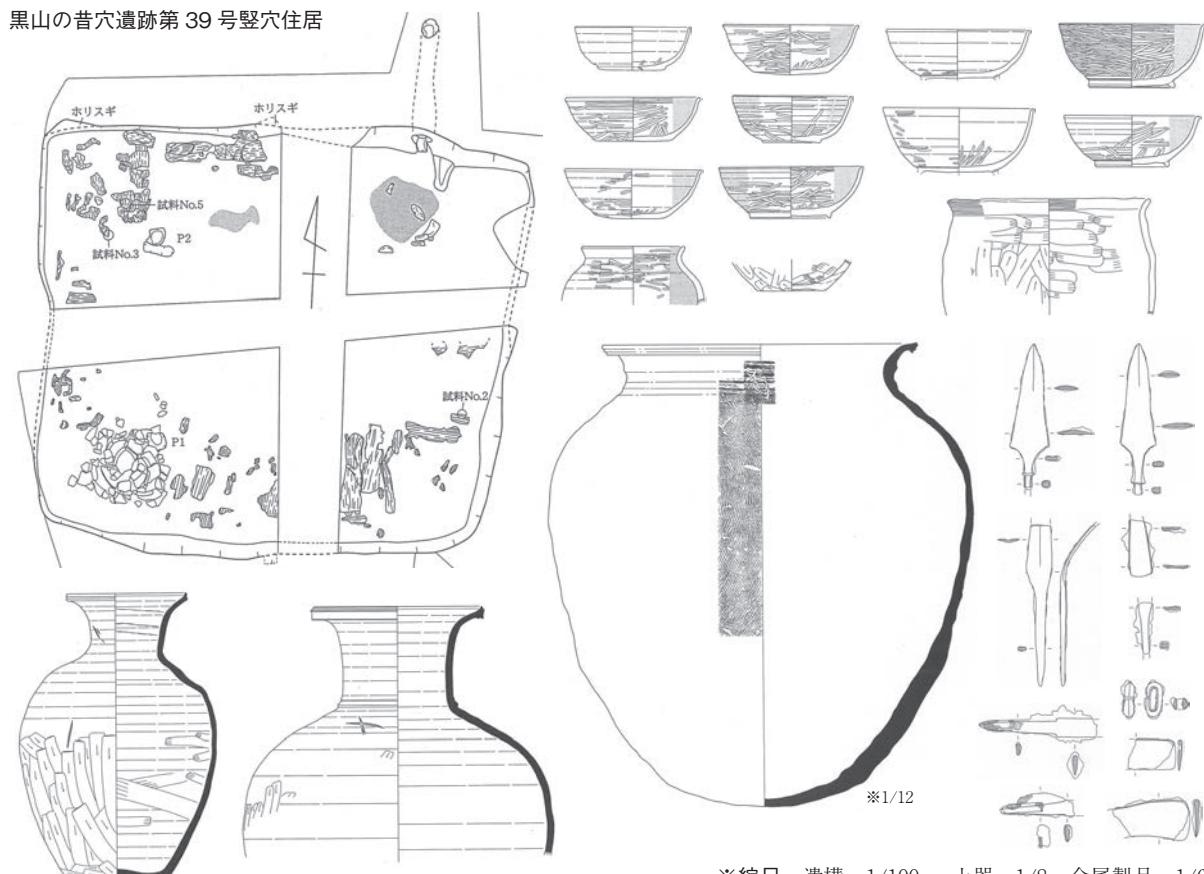
3. 遺物の内容

遺構内外を問わず第2表にある種別が出土しており、以下では種別毎に出土傾向を見ていく。

(1) 土器類

出土遺物の主体となるものであり、土師器と須恵器がある。土師器甕が最も多く、12遺跡で出土している。非口クロ成形の製品が基本であり、ロクロ成形の製品は江刺家K III - 3・H II - 1住居な

黒山の昔穴遺跡第39号竪穴住居



※縮尺 遺構=1/100、土器=1/8、金属製品=1/6

第7図 10世紀の竪穴建物（3）

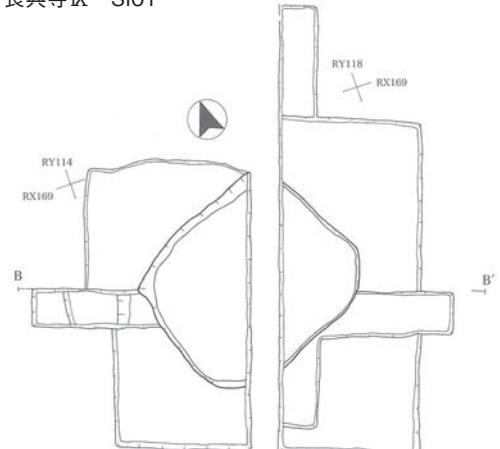
ど9世紀後葉～10世紀前葉の堅穴建物から若干出土しているのみである（第4図）。土師器壺は7遺跡で出土しており、7～8世紀代の遺跡では非口クロ成形の製品のみ、9世紀後葉以降の遺跡では口クロ成形の製品が主体である。また、9世紀後葉～10世紀前葉の江刺家K III-3住居で高台が長くハの字状に開く高台壺が出土している（第4図）。なお、江刺家遺跡では体部外面に「千」？と墨書された土師器壺が2点出土している（第9図）。10世紀中葉以降になると高台が短く内外面黒色処理が施された壺が出現するが、まとまった出土量があるのは黒山の昔穴第39号堅穴住居のみである（第7図）。製塩土器は、江刺家H II-1住居から1点出土している（第4図）。甌の底部として報告されているが、器壁が厚く輪積痕も明瞭なことから口縁部の破片と考えられる（濱田2000）。

須恵器は4遺跡で出土しているが、土師器と異なり壺は確認されていない。甌と壺は10世紀代の製品が大半であり、特に中～後葉の嶽II遺跡・黒山の昔穴遺跡・外久保遺跡では青森県五所川原窯産と推定される製品が出土している（宇部2021）。

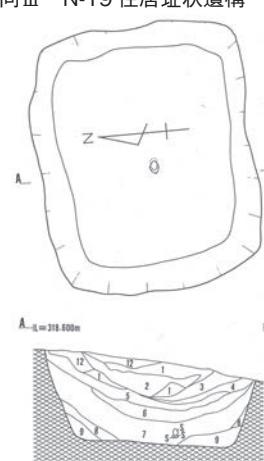
（2）金属製品

全て鉄製品であり、7遺跡で出土している。最も古いものは丸木橋第8号住居から出土した刀子で（第3図）、その他は9世紀後葉以降に属する。種別としては鎌・馬具・刀子・農工具・紡錘車・釘等があり、黒山の昔穴遺跡では全種別が出土している。鎌は江刺家遺跡で柳葉式と長頸式、黒山の昔穴遺跡で柳葉式が出土している（第7・9図）。馬具は外久保遺跡で鉗具、黒山の昔穴遺跡で鐙吊金具

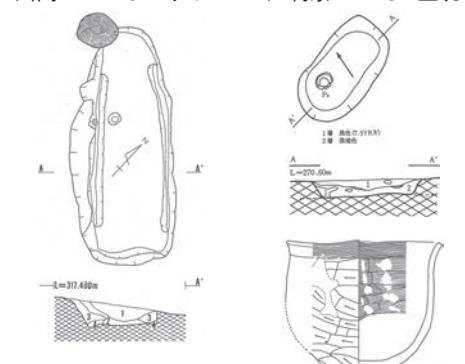
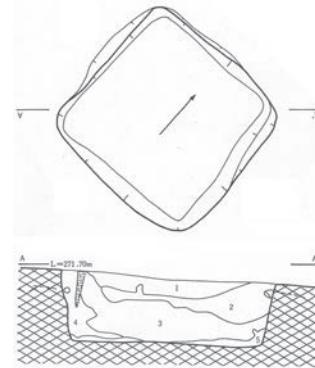
長興寺IX SI01



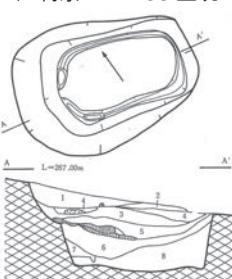
川向III N-19 住居址状遺構



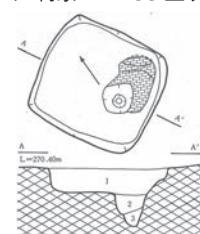
江刺家 H II-51 土坑



江刺家 K II-55 土坑



江刺家 II-55 土坑



※縮尺 遺構=1/100、遺物=1/8

第8図 平安時代の堅穴状遺構・土坑

第2表 遺跡別出土遺物一覧

No.	遺跡名	土師器			須恵器			金属製品						石製品		土製品		木製品			生産関連			その他		備 考		
		壺	壺	製塙	壺	壺	壺	鐵	馬具	刀子	農工具	紡錘車	釘	他・不明	砥石	石皿	石帶	支脚	手づくね	椀	櫛	他・不明	羽口	鉄滓	坩堝	炭化種子	琥珀	
1	丸木橋	○	○							○					○													
2	葉ノ木沢																											器種不明の土師器
3	嶽Ⅰ	○																										
4	嶽Ⅱ	○			○					○	○	○				○		○	○	○								
5	滝谷Ⅲ	○	○							○													○					
6	江刺家	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	土師器壺に墨書	
7	田代	○	○																									
8	黒山の昔穴	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	○	○					須恵器転用現有り	
9	外久保	○	○		○		○	○	○	○					○			○	○			○						
10	長興寺Ⅰ																										古代遺物無し	
11	長興寺Ⅳ																	○									炭化材	
12	沖	○																										
13	南田Ⅰ	○														○					○							
14	熊野館	○																										
15	川向Ⅲ	○	○						○						○							○						

が出土しており、吊金具は木芯金属張三角錐形壺蓋の一部である（第6・9図、村田2021）。農工具は外久保遺跡で手鎌、黒山の昔穴遺跡で鋤先が出土している（第6・9図）。この他、黒山の昔穴第39号竪穴住居からは鉄鐸の可能性がある円筒状製品が出土している（第9図）。

(3) 石製品

6遺跡で出土している。砥石が5遺跡と最も多く、7世紀中葉の丸木橋遺跡から10世紀後葉の嶽Ⅱ遺跡まで確認されている（第3・5・6図）。江刺家KⅢ-3号住居から出土した石皿は、内面に煤が付着しており燈明皿として使用された可能性がある（第4図）。石帶は江刺家遺跡の遺構外から出土したもので、チャート質粘板岩製の丸鞘である（第9図）。

(4) 土製品

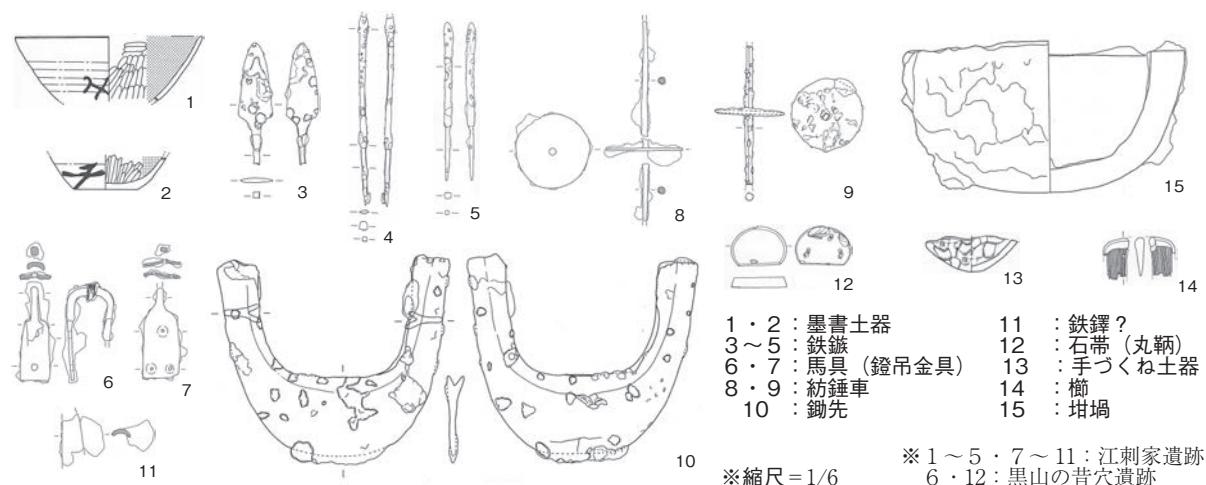
江刺家遺跡で支脚と手づくね土器、嶽Ⅱ遺跡で手づくね土器が出土している（第5・9図）。

(5) 木製品

江刺家遺跡で櫛、嶽Ⅱ遺跡で椀の可能性がある小片、外久保遺跡で炭化した椀や加工痕のある板状・棒状の炭化材が多数出土している（第6・9図）。外久保遺跡では加工痕の無い炭化材も多数出土しており、加工痕の有無にかかわらず樹種はオニグルミ・ケヤキ・コナラが多い。

(6) 生産関連遺物

羽口・鉄滓・坩堝があり、6遺跡で出土している。羽口は完形品は無いが、器壁が厚く、内径が小



第9図 主な出土遺物

さいものが多い（第4・5図）。鉄滓は精錬鍛冶に伴うものが主体で、嶽II第24号住居では鍛冶炉と考えられる地床炉の周辺から出土している（第5図）。埴堀は黒山の昔穴8号竪穴状遺構から出土しているが、共伴する土器が無く詳細な年代は不明である（第9図）。

（7）その他

3遺跡で炭化種子、江刺家遺跡で琥珀が出土している。炭化種子は、江刺家F II - 1住居からイネ・アワ、外久保S I 02 - 2からイネを主体にコムギ・ヒエ・ソバ・オニグルミ・トチノキ・サンショウ、黒山の昔穴第39号竪穴住居からアズキが検出されている。

4. 集落の時期と立地

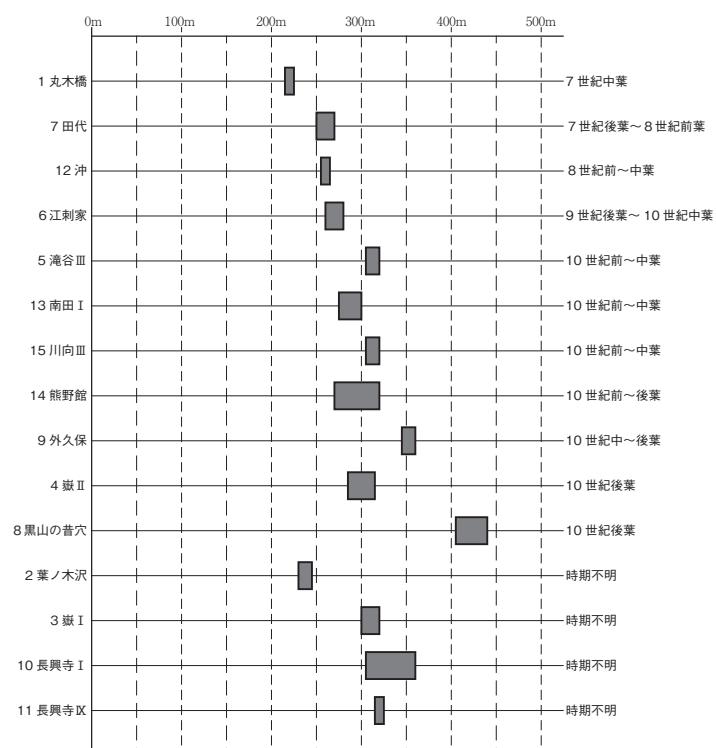
第10図は時期別に遺跡の標高を模式的に表したもの、第11図上段は平面的な分布を表したものである。これらを見ると、古い時期の遺跡はいずれも瀬月内川沿いの低位段丘上に位置しており、7世紀中葉の丸木橋遺跡の標高215～225mが最も低く、7世紀後葉～8世紀前葉の田代遺跡が250～270m、8世紀前～中葉の沖遺跡が260～270mとなっている。この時期までの遺跡で竪穴建物が複数検出された遺跡は丸木橋遺跡のみであるが、建物の分布をみると平坦地に重複せず等間隔で構築されていることがわかる（第11図下段）。

九戸村では8世紀後葉～9世紀中葉にいったん集落の形成が途切れるが、9世紀後葉には8世紀中葉以前の遺跡よりも若干標高の高い瀬月内川西岸の緩斜面に立地する江刺家遺跡（260～280m）で新たに集落が形成される。江刺家遺跡では壁面が接するほど近接する建物もあるが、直接切り合うもののは無く、4～5つのグループのまとまりが確認できる（第11図下段）。

10世紀に入ると江刺家地区では滝谷III遺跡が江刺家遺跡より標高の高い地点（305～320m）に形成され、伊保内地区でも瀬月内川西岸の丘陵尾根先端部に南田I遺跡（275～300m）や川向III遺跡（305～320m）、東岸では熊野館跡（14）が丘陵突端部に形成される。

10世紀中葉以降になるとさらに折爪岳（852.2m）や小倉岳（652m）から延びる急峻な山間部の尾根上に立地するようになる。10世紀後葉に形成された嶽II遺跡は285～315mと比較的標高は低いが、外久保遺跡は345～360m、最も標高の高い黒山の昔穴遺跡は405～440mであり、瀬月内川からも2km以上離れている。ただし、この時期の遺跡は基本的に瀬月内川へと流れ込む沢に沿って分布する傾向がある。黒山の昔穴遺跡を例に遺構の分布をみると、竪穴建物と想定される窪みが尾根筋とその周辺の平坦部に列状に分布している（第11図下段）。なお、黒山の昔穴遺跡では65箇所見つかっている窪みのうち、発掘調査により5箇所が竪穴建物、2箇所が土坑と判明している。

以上が時期的な立地の変化である。この立地と標高の関係から推定すると、時

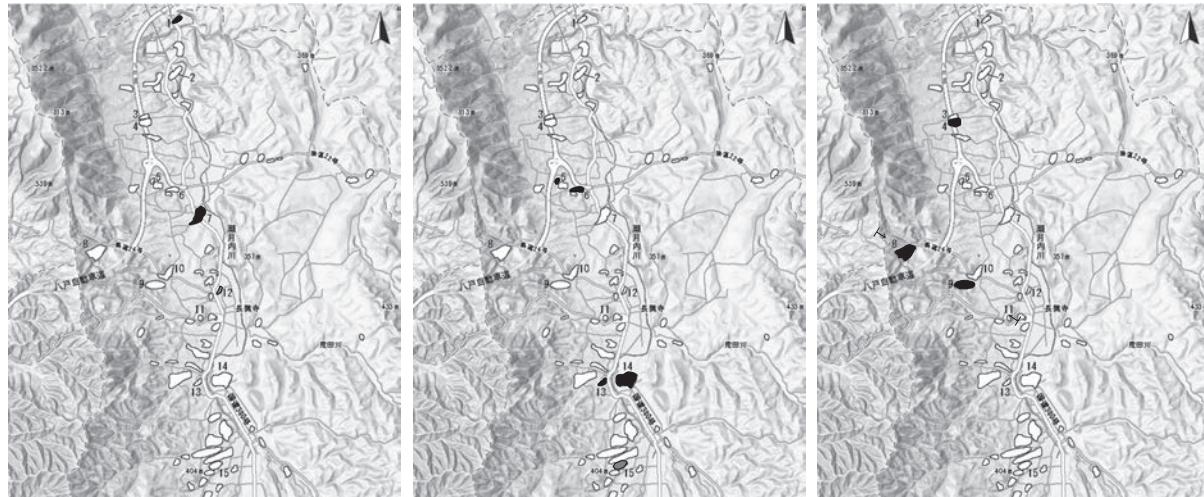


第10図 標高分布図

期不明とした4遺跡のうち、葉ノ木沢遺跡（2）は9世紀後葉以前、嶽I遺跡（3）・長興寺I遺跡・長興寺IX遺跡は10世紀以降に形成されたと考えられる。これについては、先述した長興寺IX遺跡の竪穴状遺構S I 01・03がTo-aテフラ堆積層を掘り込んで構築されていることからも裏付けられる。

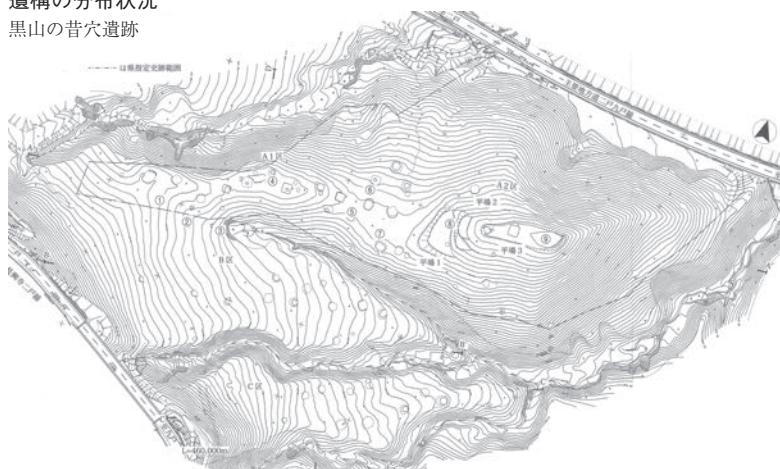
5. まとめ

最後に、ここまでみてきた九戸村の古代集落の内容をまとめていく。まず遺構のうち竪穴建物は、主軸方向や柱構造、煙道部の傾きなど細部での変化はありつつも、7世紀中葉から10世紀後葉まで時期別遺跡分布図（縮尺=1/150,000）

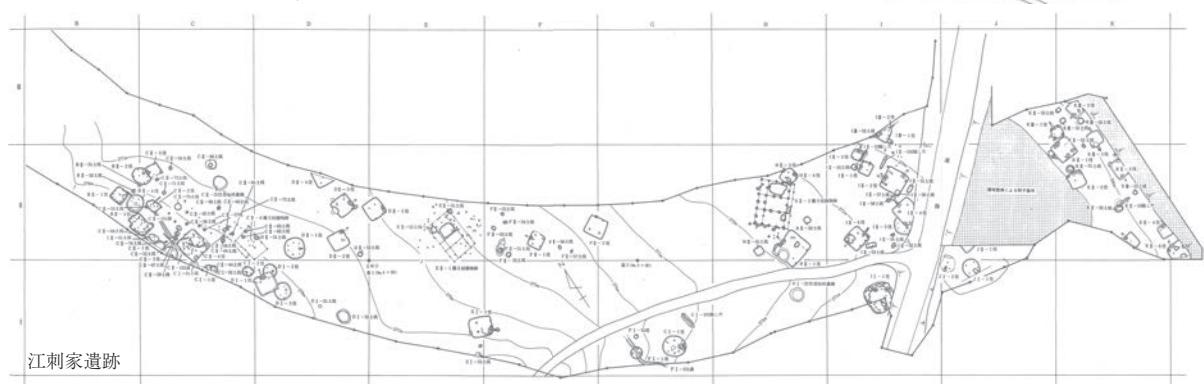
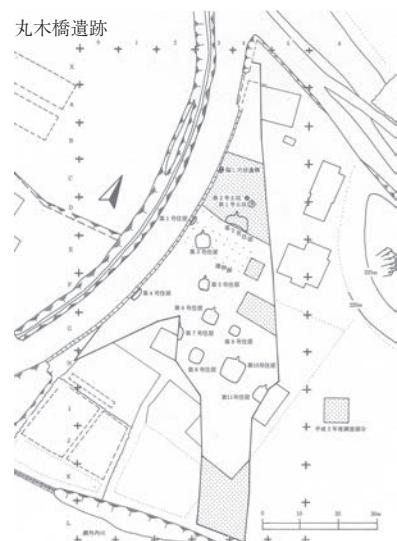


遺構の分布状況

黒山の昔穴遺跡



※縮尺 丸木橋遺跡・江刺家遺跡=1/2,000
黒山の昔穴遺跡=1/5,000



第11図 時期別遺跡分布図・主要遺跡遺構配置図

基本的な構造に大幅な変化は認められない。堅穴状遺構は出土遺物が乏しく時期決定が困難であるが、いずれも10世紀代で形態は画一的である。土坑は9世紀後葉以降のもので、平・断面形は多様であり、土坑墓や火葬墓の可能性があるものも確認されている。

次に集落の立地をみると、古い時期は瀬月内川沿いの標高の低い地点に立地していたが、時代が新しくなるにつれて山間部の標高の高い地点へと移動しており、古い時期の集落内に回帰するものは認められない。また、高地性集落とされる10世紀中～後葉の黒山の昔穴遺跡や外久保遺跡と同時期の集落は瀬月内川沿いの低地には確認されておらず、標高の大きく異なる地点に立地する集落は併存していない。このことから、当地域ではこれらの集落の立地の原因を単純な人口増加による土地の不足や蝦夷社会の社会的緊張に求めることは難しく、先にも触れたように「山地を積極的に選択した何らかの理由」を考える必要がある。出土遺物を見ると、10世紀以降の集落では鉄生産関連遺物が出土する傾向が強い。また、外久保遺跡では加工痕のある炭化材が多量に出土しており、木製品または木炭の生産を行っていたと考えられる。明確な生産遺構は未検出であるが、当地域の高地性集落は鉄製品や木製品の生産に適した場所＝原料・燃料となる木材や水資源の豊富な沢沿いの山間部を意識的に選んで形成されたと考えられる。なお、外久保S I 02-2からは炭化したイネが多量に出土している。立地的に外久保遺跡ではイネの栽培は難しいと考えられることから、瀬月内川沿いの未調査遺跡の中に水田域あるいは水田を伴う集落が存在し、そこで生産されたイネが外久保遺跡に運び込まれていた可能性がある。

遺跡分布の要因について、他地域の様相を参考に考えてみたい。九戸村と同じく北緯40°線以北に位置する秋田県鹿角・北秋田・能代地域では、9世紀末以降に遺跡数・堅穴建物軒数が急増し、それに伴い鉄生産関連遺物の出土量も増加する。遺跡の分布も能代川の中・下流域から上流の標高の高い地点へと移動しており、九戸村と傾向は類似している。秋田県北部における遺跡数の増加原因是、元慶の乱（878年）以降の律令国家による北方への版図拡大＝開発と想定されている（宇田川・島影2014）。九戸村では8世紀中葉の沖遺跡まで一度集落の形成が途切れており、再び形成されるのは9世紀後葉の江刺家遺跡からである。遺構の主体である堅穴建物は8世紀中葉以前と9世紀後葉以降で大幅な変化はみられないが、石帶（江刺家遺跡）や馬具（外久保・黒山の昔穴遺跡）といった律令国家に関わる遺物や生産関連遺物（江刺家・滝谷Ⅲ・川向Ⅲ・外久保・嶽Ⅱ・黒山の昔穴遺跡）が出土するようになる。このことから、九戸村における9世紀後葉以降の集落形成については秋田県北部と同じく律令国家による移民を伴う北方開発が大きな要因であったと考えられる。

おわりに

本稿では九戸郡西部のうち九戸村の古代集落の様相についてみてきた。次稿では同じく高地性集落の調査が行われている軽米町と久慈市山形町（旧山形村）を対象として同様の分析を行い、今回の分析結果との比較を行ってみたい。

註

1. 遺跡数は、2024年6月末時点で岩手県教育委員会生涯学習文化財課が作成した「いわて遺跡地図（<https://maizobunkazai-web.pref.iwate.jp/>）」に掲載されているものである。
2. 遺構種別で掘立柱建物・溝・その他は九戸村では検出されていないが、次稿で対象とする軽米町・山形村では検出されており、同一基準で検討を行うため項目として残している。なお、年代のうち11世紀代についても同様である。
3. 南田I遺跡の1号堅穴住居は規模が小さく堅穴状遺構となる可能性もあるが、全形が不明であることと壁面の立ち上がりが比較的緩やかであることから報告書の記載に従い堅穴建物とした。

参考文献

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は岩文振第○集と省略）
- 1982a 『川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩文振第26集
1982b 『田代遺跡発掘調査報告書』岩文振第41集
1983a 『滝谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩文振第49集
1983b 『沼山遺跡・嶽I遺跡・土弓I遺跡発掘調査報告書』岩文振第50集
1984a 『江刺家遺跡発掘調査報告書』岩文振第70集
1984b 『嶽II遺跡発掘調査報告書』岩文振第78集
1990 『葉ノ木沢遺跡発掘調査報告書』岩文振第154集
1993 『丸木橋遺跡発掘調査報告書』岩文振第189集
1999 『南田I遺跡発掘調査報告書』岩文振第307集
2002 『長興寺I遺跡発掘調査報告書』岩文振第388集
2019 「(4) 沖遺跡」『平成30年度発掘調査報告書』岩文振第708集
- 宇田川浩一・島影壮憲 2014 「鹿角・北秋田・能代地区」『9~11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』北東北古代集落遺跡研究会
- 宇部則保 2007 「青森県南部~岩手県北部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
2013 「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』第2号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
2020 「東北北部型土師器について」『研究紀要』第10号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
2021 「総括 IV. 黒山の昔穴遺跡周辺の須恵器流通」『黒山の昔穴遺跡と関連遺跡 - 黒山の昔穴遺跡総括報告書 -』九戸村文化財調査報告書第12集
- 小口雅史・岩井浩人 2023 「岩手県・秋田県における古代末期環濠集落・高地性集落の踏査」『青山考古』第39号 青山考古学会
- 小口雅史・八木光則 2022 「岩手県の高地性集落（山地集落）の踏査」『法政史学』第97号 法政大学史学会
- 工藤雅樹 1995 「北日本の平安時代環濠集落・高地性集落」『考古学ジャーナル』No.387 ニュー・サイエンス社
- 九戸村教育委員会 1996 『熊野館跡発掘調査報告書』九戸村文化財調査報告書第1集
2002 『九戸村内遺跡詳細分布調査報告書I（戸田地区）』九戸村文化財調査報告書第3集
2003a 『九戸村内遺跡詳細分布調査報告書II（伊保内地区）』九戸村文化財調査報告書第4集
2003b 『黒山の昔穴遺跡 平成14年度村内遺跡発掘調査概報』九戸村文化財調査報告書第5集
2004a 『九戸村内遺跡詳細分布調査報告書III（江刺家地区）』九戸村文化財調査報告書第6集
2004b 『黒山の昔穴遺跡 平成15年度村内遺跡発掘調査概報』九戸村文化財調査報告書第7集
2005 『黒山の昔穴遺跡発掘調査報告書』九戸村文化財調査報告書第8集
2021 『黒山の昔穴遺跡と関連遺跡 - 黒山の昔穴遺跡総括報告書 -』九戸村文化財調査報告書第12集
- 高田和徳 2021 「総括 III. 黒山の昔穴遺跡と周辺遺跡」『黒山の昔穴遺跡と関連遺跡 - 黒山の昔穴遺跡総括報告書 -』九戸村文化財調査報告書第12集
- 田中美穂 2014 「二戸・九戸・閉伊地区」『9~11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』北東北古代集落遺跡研究会
- 種市 進 1982 「折爪岳東麓の遺跡と湧水」『紀要 II』岩手県埋蔵文化財センター
- 西澤正晴 2023 「岩手県における平安時代墓制の概要」『北東北の平安時代墓制』北東北三県考古学会合同公開シンポジウム 資料集 岩手考古学会・青森県考古学会・秋田考古学協会
- 羽柴直人 1995 「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『紀要 XV』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 濱田 宏 2000 「岩手県内出土の土製支脚 - 古代土器製塙の実証に向けて -」『紀要 IX』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 福島大学行政社会学部考古学研究室
1996 「西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡、岩手町横田館遺跡発掘調査概要」『岩手考古学』第8号 岩手考古学会
2000 「西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡発掘調査概要II」『岩手考古学』第12号 岩手考古学会
- 村田 淳 2021 「岩手県内出土の古代馬具集成」『紀要』第40号 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 八木光則 2011 「北奥の古代末期圍郭集落」『古代中世の蝦夷社会』高志書院
- 図版出典
- 第1・2・10図：筆者作成、第3図：岩文振第41・189・708集から加筆・転載、第4図：岩文振第70集から加筆・転載
第5図：岩文振第26・70・78集から加筆・転載、第6図：九戸村第8・12集から加筆・転載
第7図：九戸村第8集から加筆・転載、第8図：岩文振第26・70集、九戸村第12集から加筆・転載
第9図：岩文振第70集、九戸村第12集から加筆・転載
第11図：筆者作成及び岩文振第70・189集、九戸村第12集から加筆・転載